

Aはパッチリとした少し釣り目の、鼻筋の通った凛々しい顔つきで、唇はいつも一の字に固く結ばれていた。性格はいたって静か。何をするにも冷静沈着だった。

Mはフサフサとした長い睫毛の生えた、一重の優しげな垂れ目で、鼻も唇も輪郭も小さめの、小動物を思わせるような容貌だった。性格は穏やか。所作のすべてがしとやかだった。

Tはバランスのとれた、突出した部分のない一見どこにでもいるような顔立ちのように見えたが、表情をよく観察していると、犬歯が少し鋭く眼光が七色に変化した。性格は明るかったが、ここでは明るいと言っても大声で笑うというまでではない。

三人の少女は推定 15 歳前後と思われた。とても仲が良く、大きな箱に一人だけ入ると言うことはなく、一人が入ればもう一人、さらにもう一人と、気が付けばいつも三人一緒に箱に入っていた。

三人はいつも制服を着ていた。お揃いの蒼いワンピース。白いブラウスが襟元と袖口からのぞいていて、ワンピースの袖には赤いラインがほどこされ、背中の腰あたりに黒い大きめのリボンが結ばれていた。

Aの得意科目は終焉。Aがそれを念じるとすべてのものは終わりを遂げた。物体が粉々になったり、消えたり、壊れたりした。その為、Aには世界のすべてが美しく価値あるものと教えられていた。

Mは始まりだった。Mが直視したものすべてが、新しい何かが始まる予感を胸の内に見出した。物質は時々変化を促されるため、Mはゆったりとした視線で世界を眺めることを教えられた。

Tは拡散だった。Tの感情はすべてのものに拡散された。Tが怒ると物が歪んだ。その為、Tは常に自分の感情をコントロールするよう命じられていた。そして、Tの気持ちが大きく揺らがないよう配慮することを、他の生徒たちは暗黙の内に教えられていた。

他にも科目はあり、それぞれがすべてを身に着けてはいたが、三人の得意科目はとにかくそれだった。

少女たちは死の淵にいた。親はどこかに行ってしまう、精神世界の途方もない闇と絶望の中で、もがくことすらやめていた者も多かった。彼女たちの才能と超人的な能力をすくい上げたのは、それらに興味のある大人だった。

この学園の信念は平等と調和である。

規則正しい生活。朝起きて、朝食を取り、授業を行って、昼食、そしてまた授業。三時から自由時間だが、皆が騒ぐことはない。読書は禁止、想像力が広がるから。音楽はない、知らない、口ずさむこともない。おしゃべりは小声で、というルールになっているため、プレイルームはいつも静かな空気が流れていた。

少女は 7 歳くらいから 15 歳くらいまでいて、皆賢く協調性があった。だが、閉鎖的環境

のせいで表情が乏しく、ごく一般的な子供に比べると、とても大人しく落ち着いた風格を漂わせていた。

AとMとTは、同じ年に入園し、3人ともその時の体つきから推定して7歳ということにされた。3人は出会ってから自然とお互いにそばに寄るようになった。彼女たちは優等生というわけではなかったが、常に50人ほどいる生徒たちの中で、何かしらの特別な輝きを秘めた存在のように見えた。

Tが12歳の時、園長に呼ばれた。

園長室はほとんどの場合鍵がかかっている、中に人がいるのかいないのかさえ常日頃から不明な状態であった。園長は年に一度全校生徒の前で、入学の祝辞などを述べるが、それ以外で姿を見た者は生徒の中で誰一人としていなかった。祝辞を述べる時に生徒たちが目にする園長は、長身のスリムな男で、年齢は不詳。口と顎に茶色いひげを蓄えた、英国風の男だった。

少女たちは皆密かに園長に恋をした。なぜなら、一つ理由を挙げるとすれば、それは園長以外の教師は皆女だったからと言えるだろう。そして、彼は自分たちの教育や生活を支えてくれている存在ということ以外一切が謎の人物であり、その気配だけが残るミステリアスさが少女たちのつたない想像力をかきたてたのだった。

Tは呼ばれたとき、そこはかたく緊張していた。自分がいったいどんな用事で園長に名指しで呼ばれたのか。しかし、園長室をノックして「入りなさい」という声を聞き、ゆっくりとドアを開けると、そこには想像していたような驚きはなく、正面の大きな窓から日の当たる明るい暖かな部屋に、しっかりとした大きな本棚と机とその先に椅子に座る園長の姿が、見覚えのある風景のようにただそこにあるだけだった。

用事というのはただのプリントの配布だった。なぜTが頼まれたのかはわからないが、気まぐれだったのだろう。しかし、その出来事があって以来、Tは本当に園長が好きになってしまった。園長の大きな手や、肩や、やさしげな眼差しが、同じ部屋にいる間の彼のなにもかもがTの心を引きつけて離さなかったのだ。

そして13歳の時、今度はAが園長室に呼ばれた。

共同のベッドルームに帰ってきたAは、顔を真っ赤にしてなぜだか涙目だった。それを見たTは、なぜAがそんな表情をしているのかまったく意味がわからず、呆然とAを見ていた。Mはいつも通り朗らかに笑っていた。

14歳の年、彼女たちはほとんどの自由時間を積み木をして過ごした。

Tはいつも高く積み上げる。三角をのせてしまわないように気を付けながら、高く高く、自分の積み木がなくなるまで積み上げる。

Aは家をつくる。屋根が落ちないように、板をのせたりして工夫する。

MはTが使わない三角を集めて、床に幾何学模様をつくる。その幾何学模様をMがうっとりと見つめていると、突如として積み木から芽が生えてきたりする。

15歳になった今、彼女たちはもう卒業を間近にしていた。

三か月後に迫った卒業の日。今年学園を卒業するのは、彼女たち3人だけである。

ここを出たら自分たちはどこへ行き、何が待ち受けているのか。不安ではあるが、取り乱したりはしない。なぜなら、ここでは心を乱すことは御法度だから。なるようにしかならない、そんな精神が植えつけられていた。

その日、Mが園長室に呼ばれた。

帰ってきたMはこう言った。

「私、行く先が決まった。園長先生の養子になるの。」

Tは愕然とした。その時Aが何を考えているのかはわからなかったが、Mの拡散の力でわかった。Mは何かを勝ち得たような、誇らしい気持ちになっていた。

しかし、Tは素直におめでとうと言った。Aは黙っていたが、一言

「園長と何を話した」と言った。

するとMは頬をピンク色に染めながら、

「私のことがとても可愛いわって、本当の自分の子供にしたいわって。だから、ここを卒業したら、フィンランドにある自分の豪邸と一緒に幸せに暮らそうって…。」と言った。

「うそだ。園長はもう何も持っていないはずだ。私がすべて壊したから。」

Aがいったい何を言っているのか、Tは理解できなかった。Mも首をかしげていた。

「あの人は私の腕をつかんでこう言ったんだ。“きみの力が必要だ。力を貸してほしい。だから、私と共に来てほしい。”だけど、断った。恐かったから。そしたら、“何か念じてみる。きみは世界のすべてが、本当に美しいとでも思っているのか？きみの壊したいものを何か壊してみろ”って…。」

Aの声は、今にも消え入りそうなほど小さく、震えていた。

「私は、彼からすべてを奪った。彼自身の“終わり”を念じることはできなかった。そしたら彼は、とても喜んでいて。“すばらしい”って。自分の家も、財産すべてを無にされたにもかかわらず、笑って“実はきみたちの力による可能性に投資する資産家は大量いて、これくらいのことはすぐに取り戻せるんだよ。だから気にしなくていい。私を殺さないでくれてありがとう。今日はこの辺でさがっていい。”と言われた。よくわからないけど……彼は狂ってる気がする。」

Tはその話を聞いてまず、Aが彼のすべてだと言う、どれくらいの額の財産を消してしまったのだろうかと考えた。そして、2年前ベッドルームで涙ぐんでいたAを思い出した。

「この話を聞いてもまだ行く気がする？」

Aが静かに緊張した面持ちで聞くと、Mは無邪気に微笑んで

「……行きます。私にはもうどこにも行くところがないもの。」と言った。

「……そうか。」

それからさらに一ヶ月がたった。

Tはずっと、Aの言っていた事や、Mや園長のことを考えていた。

あの時感じた彼の魅力や、温かで思いやりのある物腰は偽りのものだったのだろうか。…いや、そんなはずはない。Tは自分の感覚を信じきっていた。Aが言っていたことが本当だったとしても、何か事情があるのかもしれない。私が彼を見つめる姿勢に、その出来事は何ら影響を及ぼさない。Tが出した結論はそれだった。

しかし、なぜ自分ではなくMが彼の養子として選ばれたのか、それだけが気がかりで仕方がなかった。自分はこんなにも彼のことを愛しているのに。心の奥底ですっと彼のことを思っているのに。Aでさえ、力になってほしいと言われていたのに、なぜ自分は…？

考えてもしょうがない。どうしようもないことだ、とTは諦めようと努力していた。

その頃、Aは内密に園長室に呼ばれていた。

Aが付き添いの先生と共に園長室に入ると、そこには園長と見知らぬ男性と女性が立っていた。Aに気付くと3人は一斉に親しみを込めた笑顔をAに向けて、しばらくニコニコと笑っていた。

「やあ、よく来てくれたねA。君にとってとても喜ばしい報告がある。ここにいるシンプソン夫妻が、君を是非とも養子にしたいと言ってきているんだ。」と園長が切り出した。

Aはその言葉を聞いて、信じられないといった面持ちで夫妻の顔を見た。

「恐がらなくても大丈夫よ、A。私たちはずっとあなたのことを見ていたの。それで決めたのよ。あなたを養子にしたいって。」

シンプソン夫人が、彼女の精一杯の愛情を感じ取れるような声でAに話しかけた。

見ていた？どこで？しかしAは一瞬不穏な気持ちになった。そういえば、プレイルームや食堂には横長の長方形の大きな鏡が、窓のように壁にめり込むように設置してあった。いつもその先に何かあるような気がしていたが、誰もそのことには触れないし、皆暗黙の内にその鏡の不可思議さについては無視していた。

「A…」

Aが名前を呼ばれて、はっとして顔を上げると、目の前にシンプソン氏の顔があった。中腰のシンプソン氏は、Aの両肩を確かに掴むと、真剣な目をして言った。

「君の名前は今日から“アダム”だ。私たちと一緒に来てくれるね？私たちの子供として、これからは共に人生を歩んでいこう。」

その力強い言葉に、Aはうろたえた。そして、じわじわと心の底から喜びの感情が湧き上がってくるのを感じた。

「……はい」

それからAは、度々シンプソン夫妻と面会するようになった。回数を重ねるごとに、Aは

夫妻のことが好きになり、夫妻の方もまた同じようだった。Aは時々無邪気な笑顔を見せるようになり、それはまるで遠い昔に捨て去った彼女の一面を取り戻すかのようなようだった。

卒業の日、AとMとTの三人は揃って黒い礼服を着て、園長室にいた。友人との別れの挨拶は済ませ、ほんのわずかな彼女たちの荷物もまとめ終えた。園長室には、園長と担任の先生とシンプソン夫妻がいた。入口のドアを背にして三人の少女は立っていて、その正面に大人たちが立っていた。

三人に卒業証書が渡され、それを各々が専用の筒にしまうと、簡単な卒業式は終わった。

「アダム、君は今日からアダム・シンプソンとしてこのご夫婦に養われ、家族になるのだよ。お父さんお母さんの言うことをよく聞いて、立派な大人になりなさい。」

そう園長が言うと、少し奥の方に立っていた夫妻がAの前に進み出て

「さあ、行きましょう」と夫人が声をかけた。

二人に肩を押され、部屋の外へ出るよう促されたAは、一瞬だけちらっと後に残されたTとMを見たが、夫妻の体に押されてあっという間に廊下へ出ると、ドアはもう二度とその先を覗くことは許されない扉のようにバタンと硬く閉じられた。

仕方ない、とAは思った。悲しくはなかった。いつも同じ箱に入っていた三人……しかし、成長していくに連れ、お互いの心が自立して少しずつ離れていくのを、箱に入りながらも感じていた。幼いころは精神が理由もなく繋がっていた存在が、大人になるとそれぞれのアイデンティティを理解したうえでの意図的な繋がりにっていくのは仕方ないことである。それに、Aの心にはこれから始まる自分の新しい人生に対する希望が大半を占めていたので、別れを悲しがるよりもそちらに目を向けようとするのは容易だった。

「アダム、ちょっといいかしら」

長い玄関へと続く廊下を歩きながら、ふとシンプソン夫人が言った。そして立ち止り、鞆の中から何か紙を数枚取り出した。

「おい、お前、今ここでってことはないだろ」

「いいじゃない。はやく試したいの」

「俺もはやく試したいが、こんなところで見つかったらヤバイぞ」

「大丈夫、平気よ。いずれやることだわ」

そんな会話を、若干はしゃいでいるような雰囲気ですいている夫妻を目にして、Aはその場にいる自分の存在がなんだか薄らいでいるような感覚を覚えた。

「アダム、ちょっとお願いなんだけど……」夫人がいきなり笑顔を作ってAを見た。

「このまま私たちのお家に帰るためには、どうしてもやらしてもらわなければならないことなのね。つまり、こういうことなの」

夫人はずっとAの目の前に写真を三枚差し出した。

「この人たちをあなたの力で消してもらいたい。でないと私たちの身に危険が及ぶの

よ」

「殺すってことですか……」

Aは青ざめて聞いた。殺すとは魂の浄化であり、死は再生への儀式だと、前に個別授業で教わった。人の死に触れたことのないAにとって、それは信じ難い事実というわけではなく、思い込もうとすれば思い込める類の認識ではあった。実際にそう考えれば、念力によって簡単に人を殺せるような気もした。しかし……

「大丈夫よ、アダム。この人たちを殺してもあなたは何の罪にも問われないわ。罪の意識を感じる必要だってないのよ。だって、この人たちは今現在とても悪い人たちで、生まれ変わっていい人にならなきゃならないような人たちなの。だから、今あなたの力で殺すことはむしろ皆にとっていいことなのよ。」

皆。とは誰のことだろう。自分はこれからも、その“皆”のために人を殺すことに、あるいは何かを破壊することになるのだろうか。そうなるような気がする。すべては園長とこの学園の策略。——戦争。という言葉がAの頭に浮かんだ。昔習った戦争についての事柄——善悪を決める必要な事態、行動。各々の生存をかけた神聖な戦いであり、勝者の考え方がこの世界の善になり、敗者の考え方が悪になる。——つまり善悪とは普遍的なものではないのか、とAは子供心に疑問に思ったものだが、そもそもこの世界のすべてをまだ理解していない自分が、正しさとは何かについて正確に判断できる能力を持ち合わせているのかと問われればそうではないと言える。だから誰かに従うしかない。今自分にとって最善なのは、この人たちに従うこと……。だったら最初から園長に協力すればよかったのではないか。あの時の恐怖は、自分の内側から滲み出る、本当に生理的と言ってもいいくらいの恐怖であったが、今冷静に考えてみると、自分はこの人たちに従うほかに道はないと思える。私もMと同じように帰る場所などどこにもなかったのだ。Tは？Tはどうするのだろうか。Tと二人でやっていくことはできない。私たちはお互いに何も持たなさすぎて、道端で二人とも死んでしまうかもしれない。それにTも、おそらくは園長の歯車の一部として働かされる運命なのだろう。断る余地は私たちにはないのだ。

Aの頭の中で、そのような思考がぐるぐると回っていたその少し前に、園長室ではTに対して園長が指示を出していた。

「T、君はこれからこの学園よりさらにワンランク上の学校へ行き、自分の能力に磨きをかけなさい。君はまだまだ未熟だ。君の力は、使い方を間違えれば君自身の危険にもつながる。施設にはこれから担任のS先生が同行してくれるよ。卒業おめでとう。」

そう言い終えると、園長はMを呼んだ。

「ビーナス」

ビーナス？

「こっちへおいで。さあ、私の隣へ……」

Tは自分の気持ちがざわざわと波打ってゆくを感じながら、Mが静かに自分の隣から離れ園長のそばまで歩み寄るのを、ただ漠然と見ていた。

Mが近くまで来ると、園長はMと手を繋ぎ、入れ替わるようにS先生がTの隣へ付いた。
何か言いたげなTの表情を見て、園長は少し考え

「T、君にはまだ名前をあげてなかったね。すまない。君は、ティアムだ。TとAとMでティアム。三人の友情と、ここでの生活を忘れないように、この名前を君に与えよう。」と、朗らかに言った。

しかし、名前をもらってもTの心は晴れなかった。それどころか、どんどん暗黒の底へと落ちていくような心境だった。

ティアムなんてそんな適当な名前嫌だとか、そんな些細なことはどうでもよく、ただ自分の状況があまりにも惨めで寂しく、報われない気持ちでいっぱいだった。施設とはどんなところなのか。どうせろくでもないところに決まっている。自分の使い道が決まるまで、今まで通り飼うだけだろ！？

ものすごい怒りと絶望。S先生に促され、ドアまでふらふらと進むと、Tは途中で立ち止り振り返った。その先に見た園長は、何の悪気も罪もないといった表情で、あの日と同じように優しい眼をしていた。隣で園長と手を繋いだままTを見送っているMは、まるで春の花の化身のように美しく愛らしい微笑みを湛えていた。そういった人間の得体のしれない魅力に対して、無条件に心が惹きつけられてしまうT。そこを利用されたのではないかと考えると、怒りを抑えることがもはや不可能なレベルにまで憤りがせり上がってきた。

廊下に出てドアが閉まると、Tはしばらくそこに突っ立って考えていた。S先生がかたわらで見守るなか、Tは、冷静に考えてこれは仕方のないことだ、と自分自身に言い聞かせた。誰も悪くない。誰も悪くないのに、どうしてこんなにも怒りが、悲しみが押し寄せてくるのだろう。園長は私の拡散の力を恐れていた。だから、卒業までは自分を好きでいさせようとしたんだ。私の気持ちは皆に広まるから。……いや、そんなことはない。これはすべて偶然だ。私が園長を好きになったのも、彼がMを選んだのも。馬鹿げた考えだ。忘れよう何もかも。すべては無だ。

廊下を進みながら、Tが自分の気持ちを落ち着かせようと努力しているとき、Aは選択を迫られていた。

俯きながら歩いてくるTに、最初に気付いたのはAだった。そして、Tもまたすぐに目の前の先にいるAたちに気付いた。

お互いの目が合い、しばらく無言のまま見つめ合う。じわじわと絶望の空気がその場を満たしていった。AはそれがTから放出されているものと理解はしていても、自分の中からそれを拭い去ることはできなかった。溢れ出す負のオーラ。

その時、園長室で不穏な空気を感じ取った園長は、Mにこう言った。

「少しやりすぎたかな。ビーナス、Tが落ち込んでいるようだ。慰めに行ってやりなさい。」

「はい。」

Mは小走りで園長室を出ていくと、玄関ホールに向かって進み、やがて廊下の先にAやT

たちを確認した。そして、二人にそっと近づくと

「ティアム、アダム、落ち着いて」

と言い、真っ直ぐに、TとAの目を交互に見つめた。

二人にとってMの眼差しは久しく見ないものだった。動物のように黒い空洞。その中に宇宙にある星のように散りばめられたいくつかの光。彼女の視線は一瞬にして人の心を惹きつけ、離さない。

しかし、Mの始まりの力によって、Tの心に新しい何かが芽生えたとしても、Tはそれが自分本来のものではないことを知っていた。

Aもまた、Mに見つめられて初めての感情が生まれたが、それは今までに感じたことのない完全なる絶望そのものでしかなかった。なぜなら、Aは自分の中のすべての希望や喜び、前向きな感情をかつて経験させられていたからだ。

世界が地に落ちていく。

ごおお…という地響きとともに、学園の建物が崩れ始めた。何も知らない少女たちや先生たち、その場にいたS先生やシンプソン夫妻までもが、心に冷たい氷を抱きながら、金縛りで身動きがとれない状態だった。園長もまた、Tを抱きしめに行こうとしたが遅く、重くのしかかる空気の重圧に耐えきれずに地面を這いつくばっていた。

Aの中で歌が聞こえた。初めての歌……

——感情をさらけ出せ そうすればわかるさ 君は世界の一部 君の感情は世界を動かしている——

「わあああああああああつ」というAの叫びが、轟音の間を縫うようにこだましていた。Aは、もはやこの学園の崩壊を望んでいた。

Tはずっと下を向いていた。Tの気持ちが浮上することはもうありえなかった。

Mも、自分が望んでいた結果はこういう形だったのかもしれないと思い始めていた。しかし、それはTの感情の拡散によるものなのか、自分自身の本心なのか、Mには最後までわからなかった。

それから数分後に、学園は跡形もなく消え去った。少女たちも先生も、この学園に関わるすべての人間が抹消された。

だから、この出来事も世に知らされることはなかった。

完

あとがき

パフュームの **spending all my time** の P V からインスピレーションを受けて書きました。(※本人たちとは何の関係もありません。)